中村俊定文庫
文庫 18
330
2

硯君伝

ら

改名帳

ES

宮城県図書館蔵

硯びらき

春の部

雪ゝトさん先むくるゝ紀の瓢波　嵐雪

出ゝ行や寒ゝ明ける天乃原　白峯

留ゝ小判のほゝ初春色　丹志

青柳やいきよせてもんちし　米仲

我ゝ行くゝと春の汐くゝ萩ゝの名　買明

同し茎拾ふや行案仏の出　樓川

中村俊定文庫

法師うゝ梅樹せ人ゝ為　湖十
営ゝ古ゝ蒔られぬ舟の秋　紀逸
嘉州の及をきゝゝ中粧を日　再賀
馬やきる月新ゝゝ焼聖京　鶏口

うゝひきやうのみ白ゝ茶緒洒　甘棠
小ちゝつき流きて夜み柳ゝ　蘭舟
吳見いゝ枝の先なる蛙ゝれ　堂簫

蝶ゝ也思ゝ出写ゝ元まて　立豊
十種糸の宮ゝと連ゝ梅乱　圃窓
月新の刺ゝ月ゝ梅乃花　旭和
今梅ゝ小神ゝ田楽　故注
辛海やきゝ　遠て秋月　藹逸
紅梅や連ゝ女乃ゝ　再和
栄の戸や寿ゝ梅ゝ　在貫
梅咲ゝ和泉式部乃外ゝ　萬貢

海棠も蕚も破れて菜たうり　祥
手折せぬさくらも捨ぬ春の暮　亀成
梅の香や手元の闇へおよびし　嵐蘭
やすらへる家堂うち彼岸うち　貞風
七卦みつゆく去年の淡菜汁　丹鳳
菖蒲を江戸なつかしや菜摘　田鳳
赤き魚も舞よせる糸の流　女　蕙
落る日残る名残やいのの里　田女

掬されて雫のはずる小船哉　立志
むらさの花中よりとうろ　吟市
桃さくや日和のうまる女うし　團窓
某の戸乃月も匂ふや梅の香　牆立
弟と時雨てるやの風の小ぬか袖　立豊
赤魚も火もとれども徒なる　麗来
風巾を家乃宵へ猿を待　丹志
学や時うく画ても婚の寺　紀貝

濡色て帆ハ見さし　春の雨　杜谷

漕戸掛の清さよ刻る橋の風　茶外

ふり向も見ぬ山や汐干潟　連尺

名ふ共人登せて山と丸見　相重

俳味を海老の子ゑる汐干かな　團窓

春の日接穂よんなく日の永　文里

（ひさよ源右衛を赤兄の祝よ志つゝ
兄弟共ゑう紅面ひまふを賀して）

其先も祝を白ハし花ちの門　篤志

おそろしや花のもしを言渕舟　立守

穴よ鳴る掛の数ふ風巾　紀貝

川上さうき世のかや桃乃家　小田原　巴丘

さそふ白ひもつゝ莫の神　参由

青麦ふ法ア もこもふ雉鳴声　芦翁

掛の枝や麦大根ふ程ふくろ　竹人

うゝひさ和見ふ蓬き小笹原　得魚

ま形や代さみとり北渥汁　麦由

まち角やとをふる布ぬ揉拍子　小田原　李由

通つうとふの欲の樹の秋　金文明改　一路

芙蓉や蝶のこゑ聚ハまつ見ん　金　義松

蛙鳴くこゑ揃ふ秋の水　金　和水

梅の香やとも通ふ宮の内　金　泉十

鶯や鯉やむうなのうち捲の蓋　金　麥由

禁うち一目ち宮ち揃うれ　金　卓示

り春也雪乃ぬ名も立ちれ　金　朱明

日ち本の梅乃ち本て涅槃像　大桟　麥由

菊花みんを鉢るち一も艸　貫古

起よ〳〵秋の梅ち本へ　豆列集　松甫

芙艸ち水ち本ち岩ち敷れ弱　金　和律

引汐ち芙蓉ち茅とふ和布ち　金　松倭

板や屋と人の問まてさうのち　金　李風

世云花のやうち住ち紀淡世ち　金　立波

秋物も後ち八月ち柳ち家　金　松華

声細き冨士に根の雪　松調（伊東九年）

小徒ふ言根うしめ出て　梅甫（仝年）

蛙鳴く夢ふ川柳　仙甫（仝年）

（女郎屋おの〻別の人〻を和歌の浦一流引して）

汐干ふ八重門ふ宇男浪　松甫（仝）

織ふ〻ふ年ふ宋なる柳の家　友衡（鍋代）

人写ふ春ふ〻してや吉ふ汐　赤城（仝）

天目ふ酒の海ふ事汐干狩　和水（仝）

枯柳飛て蛙乃ぶまく青し　五柄（仝）

山〻ふ吉ふ嶺れて藤の花　魯水（仝）

聖廟奉納　題亀井戸

梅の香や飛て二百里白鷺　丹志（百年）

初午（南朝四百八十寺といへる古庚人の自慢気）

初午や幟ふ四千八百樹　仝

ふ月午ふ柏ふ〻ふ面　蕭

初出乃花も菓を実はめ　杜谷

初むまめ赤くもめる岩のつく　紀貝

そつ手や春と花とを杉乃奥　紀逸

春雨や硯手拭きふてらん　国窓

春の暮利休の供を大工哉　立豊

山里乃石吉ふし　蛍　柳　芦温泉　栄保

掘る手ゆ寄る鋤る蕨哉　豆州三島　秋湖

浦まて手伝引き連る浦しほ　仝　芋花

岩よ見し山と思へとを久ら乃ふ　仝　湖燕

秋雨ゆ寄めつ掘ち支柳のな　仝　来雨

春風ゆ掘をもとまや糸柳　仝　谷橋

山さら芦や津辺の汀夜更　仝　竹志

新緑更岩ゆ深しほしほ　仝　歌蝦

蛍や引捨てまつ風も涼し　仝　芦丈

糸柳や柳ゆ通ふひとむもそ　仝　枝蛙

人ゆまつ場手ゆ入ぬ梅見ふ　常州土浦　演元

春雨や文古人　奥州宮城　古停

味噌屋や文古人　停

六畳ゝ臭をたのゝるこの猫ゝ妻　国窓

青苔し蛤洗ゝ小家　雛　丹志

淵淀へ赤い風ふく汐干ゝ　丹成

隅家ゝ敬くゝ石ゝ忘ゝ居ゝ　理空

尼乃戸み拭の云ゝ紙ゝ彼岸ゝ　以水

綾ひの重ゝ指ゝ寺ゝ春ゝ　臺梅

波風ゝ人ゝ立ゝ抜ゝ彼岸ゝ　紀貝

歌枕蕪ゝ立ゝ乃ゝ胡麻ゝ　紀見

川下へ捻の流れゝ花ゝ　紀逸

狐ゝ中垣ゝ立ゝ義乃山　因社

一とせ中上吐ゝ此吟ゝ
又十年横の下乃横日ゝとせ　もゝや
ひとむの十人砂和九人無むく犬の
ゝゝと云ゝも軒ゝ　雨下屋乃
市造の塔を汚しゝて茂ゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
懐慈を起しゝ作ゝ

花ゝ筏ゝ燃ゝ銅吹ゝ屋ゝ乃　丹志

釈の世ゝ市稼乃ゝ桜ゝ　雪羽

苔ゝ花ゝ月ゝ絵ゝ水ゝ柱ゝ　紀逸

柳のうら末くく柳のうら枯て　立豊

拾くまち拾くまちんいのうら　紀逸

追他御文面句

三日月や根入のうる柿の姉　磧水（小倉）

傾城の曉をそき蛙可角　平蕉（仝）

陽炎やまゝ名の付ぬ草も有　和帆（仝）

出代や蝶を連れ旭の門　蘭江（仝）

咲也此山口者るゝ一木うな　巴水（福浦）

芽乃郎

古屋や一里ゝ一ねうんこうの　買助

庭の蛙声をとるやむとまり　蓋角

雨雲乃傘へゝ之手一部云　蓋蕉（女）

悔へ旭を法くまで杜丹うな　立巷

云かちみ小家の角やかつる　紀逸

ゝ一人なせはめるやの紀はゝ　丹志

滝仏やおそ孫しうぬみ乃味　湖十

時不の〜穴も奪ふ和枯葉　蘭舟
葉さゝや赤き乾ける七日艸　故注
枯れもふくて結ぶ初杉菰　在貫
流罪のう矢を射る魚を川鵜　田風
子を捨ほとゝ人のさゝ〇ゝ〜ゝ　吟糸
蓑笠のまゝ紫草の保と成　丹風

麻布の御山いたゝしの元ゆ多きよし
葉内乃童かゝさゝ作る初夏ゆ花を曹〜

葉桜花よ紙の人さん三笠山　晃蕚

反り返る鐙ゆ白ゆき梁ゆ　藤逸
江島や行も戻るを初鶯　文里

無地無自

筆北清ゆ文出し陶ゆな　旭和

雲上池る雞ゆ山

咲乃ゆる寺や川〜の花葵　丹志
下の句ゆ呼ゆ屋やゆき寺　立豊
薩仏や取扱像ゆ杉ゆ寺　紀見
男ゆ尺人ゆ女乃田植ゆ　万貢

五月雨や一日きりの乃ち晴　井棠

小女郎口上しあやめ艸　桃鏡
（中村宗子の孫なるよしにて）

竹の子や手つ肌ぬぐ方往ひ　真甫

ほされる人をきき里も水鶏かな　雪羽

小学み胡蝶想人合歓の花　紀逸

糸瓜ゝ神もんやくを乞る　多志

写をとる人あり五月雨　丹志

夏炉冬扇思ひ出して蛍の糞　立之

浦を見み鯛来る日や天津風　杜谷

山雲と絲も松ゝ魚と共ひの音　露牙

紫陽花や雨降る日は曇り　丹成

夏草やたのしまるる屋しとろてん　次為

うち出や動の乃る春の駒　紀逸

涼みゝ夏みゝ水流れ　鶏口

木陰行く蝉の時雨月金　墻立

屋根に降る木ゝ乃下地や帰り船　紀貝

萱なし

筏の世や蝶ゞなかゝ心太　丹志

日比暮り冨士より低し雲の峰　相重

湧出して秋にかよふ涼かな　女 吟市

夕立や表の戸おまち晴きて　田女

箱根留家ぎ申して

汲まても若葉ふる手摘の吸や汁　連尺

天を幕とし地は席とし家におく
芭蕉翁壺中に山川をちゞむ秋文に
とす只芳草みとゝする方丈あり
て沈浩る哉

蝦夷ゝ秋でゝ永ふると寺する地外　棲川

鵜の画賛に

踏伸れ足も涼しや走り雨　米仲

猿沢の月我手にうつる団かな　亀成

見市比手八丈の流れし白　立雪

刈川のたまもみ久しき茄子汁　茶外

思ふ秋さ鬼一口や係とき沢　奥州岩城 古淳

雪ふる庵子志ほるや山さつき　大磯 貫古

蝶のよる竹に鳴きもんこゑ　小田原 麦由

初乃花やいろりに秋八有明く　仝 朱明

音楽は例ひるまぬ牡丹哉　巴丘
金の口く地をおさせて行く秋　和水
牧はらや打こぼる新の紙　竹人
みしの秋や鳥もあとなる郭山　昌魚
鞠垣ふよい菊の咲出る　茅松
蕎麦も庵へも蕎そ小牡丹　芋蕉
女月見やめこの世来もとる径　麦由
ふるしやうるる男乃うへを　一路

久の月や苫も物しる垣根う　芦翁
中ふ見やまを紀つめる綾の桟　麦由
盲子も麻くに戻るる蛍狩　阜尓
新麦や赤乃なの拍ぬく　菜江
豆うへ雲へ生るる光洗　和机
涼さよ久ちるる籠枕　麦十
帆をうけて丹い通ぬ墨さし　麦由
涼風や柳を出て出不入所　磧水

恵

木ゝるゝ真心ぬけやふほゝん　小田原　花外

芦屋の人形うつき杜丹の形　仝

山ちハ木立ぬすきゝ因樹外　仝

おもひねとかや夫婦の田ゝ笠　仝

庵草乃枝打をあくゝみ籠外　今年　寛光

世を捨るゝ日ぬき妻やうゝこゝる　今　高貴

高根ぬ一番ハ高し庫の高　今

桃竹ゝ行ゝとちゝ蛍ゝ　福浦　巴水

破山和尚ハこのゝ枝芭却木　芦辺　栄係

嘗の風ゝの高ゝ古里ゝ　伊東　和律

高舞ぬ者ゝ高ゝ今年外　今　可木

艸と木乃間を花のゝ咲ゝん外　仝　秋夕

夜殿のゝ一ゝ　今　松甫

ゝ月ゝ雪ぬ者ぬ消乃面　今　松侮

元の代や人乃一ゝ下　今　松竟

雪の茶ぬ俤出ゝ郭公　今　桃甫

唄に流るゝ夜の田植哉　伊東貞人　柏甫

星繪まで使ひ初る蛍哉　今　有童

啼ひゝ時月ぞ蜀魂　今　左右

夕暮の蓮の葉や夕時雨　今　蓼甫

山寺や俗を離るゝ新緑　今　松輦

さゝ出るゝ雨を日和かきつゝ　細代　魯水

接穂や花を紅上野不忍　今　友衡

池の名をの絵へ尽すあやめ哉　今　和舟

糸ひとすぢ是ぞ天の竜ゝ稲　今　五柳

ふ雨や雲みな絶せ蛙の声　三嶋　湖燕

笠山み冊伯とゝ杖ゝ戻るゝ　今　芹花

さ一上て欠流るゝや五月雨　今　秋湖

和の毛ゝ吹ゝ消て鹿乃月　今　谷橋

風鈴の休も雲なのいさゝの　今　竹志

笋や麦草ねおぬゝ捨ゝ　今　芦丈

出て二十四ゝ過すをゝ孔ゝ濃州　今　枝蛙

坪石みやくアん　三十番　秋帆

おもゝ山をおるゝ　仙芳　敬之

藻の花や踏ぬく鯉の背尤　杉雨

灌仏や児の指さす彼方　再賀

撫ずや入日涼しき石　杉谷

一斤の瓜の手書や蓮乃家　徑祥

あつさも我助けの星雨　春物

時ハ埼る梯子ふ抜ぎ　立考

四方沼み水線の奏るなつさ家　官路

夕立や瓦の小祠も川辺乃　春里

三ヶ月人形アんゝ雲ゝ　杉雨

ゆゝ影や罪深流るゝ乃下　丹志

峯ゝ八月を出る移川ル　四社

山伏の向ゝ鈴や雲ゝ　紀逸

（唱ゝ不忘の彩化掃れ之の化乃塔
年月の六ゝ ちゝ奏の丹、ゝ ゝ ゝまぬ
此面階段三百里の景色を刻ぬ）

春夏一里浦ゝ蓮乃む　丹志

秋の夕べ

金沢のうかさぬ海の夕ぐれ　蓑笛

二つ星夕べ雨を入れ老ぬ　丹志

人さわさん秋の初り我庭乃松　紫口

初尾や杉の秋光も秋光もせん　女蓑莫

静かに声なきこの蟲もて　相金

子供等を唄ふ夜の秋　丹成

稲つゝも思ひのけちき清一つ　左貢

星合や仮屋もうもれて庫乃　田風

稲佐やふ星へ手向乃切火の乳　篤志

いなつるやみの松てへは星出　春里

長しまし綾の松やきりくす　羅合

辻占やこゝ〜と来や辻角力　登社

みられ萩枯も延ん赤乃家　丹志

長崎乃ゝ持ぬ蛛の柳北　杉雨

辺へ引星ゝ辞ある渡の家　湖十

走る雲の歪てそ飛ひ業山なる　冥明
何を見て仰ぎむるて秋の空　亀寿
初月みまく山里に牧やうの　吾香
深竹を煙の中み鶯こゑ　万須
鶯のそゝ色立てうち女郎花　丹風
後のいろ錦みを春秋の色　立守

月

名月はこのうつ毋ちる探り歩　井棠

名月や百日吹消を息陸　立豊
明月やうを伸る竹の丈　紀貝
名月也雪と、毋を立て絵名　理尻
絵舞よ雲紙のやうの月　田鳥
塩の面やかうの月松一木　紀逸
一茶なる山乃遠写をほの月　牆立
梢より木よ暗の後乃月　丹志
十三夜一夜暮れ尾長鳥　四社

稲苅らぬ稲の原村や淋しき月　連尺
秋の海　旭和
秋の夕ながらの声の虫　杉雨
秋も里を表ふる塔　吟糸
秋風や芙蓉の花の移ひ　文里
初雁や月に横ふ雲の声　故註
うぶ雁や摘残りの芙蓉　再和
西俺ら空惜と名のれ角力取　鶏口

すこしく引袋く秋の川　横川
市の日も残るもゆかる秋　紀逸
大比叡のみよ紫ばらの秋　祇祥
稲妻の照らす尾ぬきやはら石　宮路
狐火の里尺て初てきぬる秋　田岱
八重の破れやう傳の菊の節句　丹志
ちら菊や雨もまぬ尺せぬ志の底　尭物
百姓を浸ロみるや兼乃花　紀見

一つあるまくらもとてきましの声　立豊

鹿

かくれ草鞋をとめて鹿の声　棠舟
幽深くしんとしもよりや鹿の声　露牙
拾穂より引捨きりの志の穂　迎年
鹿の角苔のみ[illegible]る木の実　汉子
海老色変りて鹿の鳴ぬる　負蘭
入る鹿を少し追ふ老の床　丹志

晩日より入日あかるい行秋の邨　杜谷
学寮の秋日夕日にもちう角　田且
庁鹿を答を聞[illegible]ふ紫かな　魚風
深拍乃秋のはしめをみちに　立豊
夫婦の鹿の恋　大成　貫古
恋の夫人程なる系仇系　小田系　竹人
稲ふねや菊を小ふる北ふる　仝　巴丘
八朔や稲穂も[illegible]の小ふる和　仝　麥由

白樺のてゝ雲ゝてゝ十月の氣　小西京　得魚

草枯や紫を抱く山ゆく　〃　朱明

名月や樹のうら照る水のみ　〃　麦由

振袖を四十みあまき踊かな　〃　一路

名月や時まふ人乃ち信入　〃　范五

初雪や塀の影みる一茶哉　〃　麦由

稲つまれてまもと見まる岩松　〃　義松

秋彩乃諸へをまき礎　〃　和夫

松一本庭のちのうや秋の暮　〃　阜尓

鶏鳴や村供し初稲むら乃　〃　菜江

月代を送りとけける踊かな　〃　和風

子八筋の陰ゆ庶人の竹の月　〃　平蕪

焚火と乃ゝ紫ゆらて彩酒ゆ　〃　麦由

ゝゝゝ伊達もそ春や菊立　〃　泉十

掃除ゆ拾ん庭ゆ人乃出　〃　少年　寛光

稲つまれ一束射ゆ柳の家　〃　磧水

何彩ふ糸ふ蜻も七夕の枝　小田原　五原

彩蛛の貴や梢の先へ出る　仝　五湖

苅残せ出た吉野ん竹乃原　福浦　巴水

形くるを乱る風刈残　芦田　栄保

文月の封しめをとく一葉哉　伊東女　柿枝

淋しく乃鈴ハさそ秋の紫　仝　松甫

山風や吹迄しきり五格の幕　仝　和律

角力場の木戸ゆみ咎ぬ柳哉　仝　松倭

此ごろの雨も月見とりて酒作りきん菓の花　仝　柿枝

庁庭を枝をまそ底松乃月　仝　左右

名ゝや市の上雲ハ楓の先　仝　李風

初汐や橋まで西く女男共　金貴人　松化

名月乃昼寝や老ぬ初ゝ声　細代　魚水

花も咲白きこのもとの菓の垣　仝　友衛

此月に戸ゝる雁や西ゝの墓　仝　和水

稲妻まれに聴うしまちかう間ち　細代　五柳

星合や　こゝに牛の啼く一ツ　三爲　苅花

夕蛍も供もまばらし女郎花　仝　枝蛙

一葉み波し初るやうな形　仝　芦丈

月を友とゝ為れある今宵哉　仝　秋湖

いの栗み拵へのゝる鳥の声　仝　谷橋

荒こうちまゝ裏ちらるゝ秋　仝　竹志

初雁や一葉つゝる里迄し　仝　湖燕

出る月を新月向あり貢根の松　仝　秋蝦

秋月や隈とり移る雲の端　歳　得秀

浅菊宴

冊志述

蓋に此の館を築倣みしも地法く松杉

手習之徒莫了鉢の中央み古夏を松　新　木蓮花

浅桂亜れ庭柯をこゝ巡みて仮ら分の

菊栗み弱り鉢菊英はの金九日乃無る指ら

酒のあと残み冊く菊枯芒　菊角

明星ゝ　おや寿人の茶　紀逸
先寺社を巡りしきり瓶乃菓　丹志
乱菊や出雲の遊ふ陣屋口　杜谷
ちをくいつる鶴や菓子も　紀貝
各法師ゝ多家破後園み出れと格子や
ゝ菓子ゝ夢極ゝ孔雀ものけるの菓
鉢巻ゝ鉢を袋ちまゝ狐乾菓の花み隠
屋ゝ菊ゝ高の宮下楽をゝ保ゝ浦異又

芝居もゝけ破可月み及ゝをなり
おゆゝゝのけゝゝ菓も酥の数　丹志
物ゝ菓ゝ体菊俵ゝゝ初茸もそゝ
高み菊風乃猪ゝ脇ゝをゝ排ひ斜傾の
かゝゝすを四へゝ代ゝ米村ゝん講かゝ
紙人今ゝ紙ゝう撫夫明ゝゝひゝとゝみ
世のけゝゝもゝ怪まるけゝ丹志扶を
撫ゝ高詩紙を

寂々鹿柴趣　家少保園遊
霊芝生苔地　珍禽鳴樹陰
遥聞撫琴嘯　應是羽人招
好是菖蒲花　丹丘何處求

晩秋

衣薄々嘘了蟋蟀　立春
等の火を三度めに見る　蕭逸
炉の煙とゆく人もなし　家貢

赤々と金風や猛や秋乃蝶　茶外

赤堵眺望

ひたすらに志賀の山やの紅葉　素軍

菊有る秋色　新宅の賀

紅葉の錦きく孫の齢　丹志

追加

稲津戸も谷へ落つる峯乃松　百義

生駒のうらを吸せんは月　常舟

四月廿五日を習ひ初めし頃　基策
まゝ濱くの花の盛りの時分に　丹志
はやそのみ桜ゝ石乃面う　紀十
花のうんもふる雨の初ゝ頃　丹冬
ふる花の葉の色や初時分　幡立
むゝ畫を思ひ出る時雨哉　田風
みとゝ幕を引る雨哉　茶外
岩蕨出るは雨ふる紫哉　玉豊

出るとの雨ふる中屏風山　紀逸
本の花書ふる雨ふる　杉雨
初雨や田ゝ植の朝茶の屋　魚風
ふる今人の初なき時雨哉　理志
百姓ゝ雨ふる多き志ゝ雨　卯雲
水鳥乃崎ゝ晴日向哉　杜谷
蛤ゝ雨ふる少雨あり　一布
むくのゝ雨の神や暖め哉　萬貢

初雪や白きことの皆神山　井棠

ゐてきゝ食や金屏吟　旭和

風色柳ゑ鳥もつきあへず　亀成

枝川や芋み出て枯蘆尓　紀貝

孤しく渉や梅のみこゝろ　文里

ゑの雪ゑ孤ゑゑゑゑ花ときく　虎蘭

初ゆきや八宗ゑしふゑつゑ　田鳥

おゆろや雪尺ゑゑゑゑ酒　吟市

雪ゑ月日や柘の外ふ軽ゑの色　田社

（京のかよい花ちう）

春ゑ借ゑて雪ゑ雑ゑ坊のもと　立守

水ゑ色おのれを用ふ水ゑ　紀逸

水ゑ色ゑ尺る池のかきつゑ　立豊

岩のうゑ二階と考ゑ琴ゑ　丹志

おもゑけゑ部ゑて浪ゑの音ゑ　梅川

雪ゑ月ゑ猿ゑ遠ゑて猿乃新　鶏口

起ゑゑゑ行ゑ働ゑく雪の外　菜香

雪を出て雪みてゐる海の面　冥明
重陽や月刻ぬる山の二つ三つ　巷蕉
初雪や雪み詰て角をゐる　丹志
きりゆきや水豆腐ゐれ々り　発来
大食の嵐もうてと長柴代　灰亂
春雨や梅枝絡るのつら垂　万頃
草足袋の口切迄やゐひき　田旦
んとまふ旅のふとんみなす恵　祇祥

秋晴や雲ゐ程と思ふ水引　春里
芽の新しの枯ゐ絡ゐ水枯ゐ　相重
月の輪み雲ゐ絡ゐや無畏　宮路
一つ庭火桶抱寝や詰白粉　雪羽
手水に詰ゐ白や石蕗の毛　紀見
山寺ゐ木枯打ゐ絡ゐ　蓋梅
冥土雪ゐ詰ゐ枯蕨　藤逸
餅花ゐ詰ゐの梅の低ゐ孔　故註

いくの市後ひ出るや大男　在貫
怪業や九尺ばかりの仲　大阪　貫古
紫紙のなかれる出る赤れ　筑前　巴丘
初春や森は鳥の波る内　仝　麥由
きり雲や無なる絵筆もて形て　仝　朱明
形のこと琴は指南も時の如　仝　竹人
錦つきみ恵方の影を乗れば　仝　得魚
岩の面や雪る五戒る牛童　仝　芦翁

木の下や谷へ埋める猿の声　仝　麥由
さかしや高も知らぬ猿乃声　仝　一路
風のふく三月乃名残の雪　仝　麥史
投入も一樹の陰や冬ごもり　仝　義松
春雨や白一まい日ち鶴の　仝　巴丘
遠方や芦の葉ゑる風寒　仝　麥由
海をこう紙形はかや雪乃外　仝　阜尓
冬川ゑ場形高ち柳ち　仝　磧水

降掛の力もあらん大根哉　小田原　平蓋

ちくさくも柳ちるなり　同　菜江

偽りなき雪をさへてやあひす俤　同　和風

家の内く拾ふあるを煤掃　同　和水

老の砂ち栄蜘の尾ゝ多き　福浦　巴水

世表を元みちぬしれ　伊東　松甫

寒ゝのときれくや水乃吉　同　和律

爲雪の化粧ゝ多き柳哉　同　松倭

蚊の子狂ふ中事此掛　同　桃甫

ちる花乃事知を重ね餅哉　同　松意

初東や清日菖蒲　同　左右

霜除ゝ花の寒隠ゝ毛　綱代　友衡

年ゝ蓍牛ゝ車の曲り形　同　五柿

初雪やまゝ水仙ゝ咲ゝ　同　和水

帆はゝ花紫を尽ゝ冬　同　魯水

寒菊ゝ庭みゝ山路乃戻り　三寿　芹花

水鳥はとけく拙中新景　三角　湖燕

炭竈の煙ゆたかに春霞　仝　竹志

ふるやうき世の出乃詩を吹　仝　谷梅

幸淳乃松み化粧や初しぐれ　仝　秋湖

峠のふ頃おの度やとうを　仝　枝蛙

野へくるる菜は嘆や時雨　仝　紋蝦

海苔も花のゐ地や兼果垣　仝　芦丈

末のしら出みきるき火燵　仝　来雨

初雪や姿定まる度乃作　岩城城　得秀

笹はちいふ雨のうるるる　立豊

茶塚ふ上まで下手ちい麦畑　百義

初雪は狩場呂ぬ海面　麦雨

ゆきの乃野辺ふ吹絵や雪ふ　篤志

ふる雪は枯ふる庭ふ井代　一布

風ふ髪もうれるの神乃る　羅合

苔も紫色散しふ磯ふ安ふ　冈岱

指つゝのひも伸るかゝぬ念仏　次水
手の先尾日和ときはの緒もとゝひ　丹成
周防の梅を探や鶯とゝ　登社
年の尾も乱さぬ勢の姿の手　百義
大とゝや人乃仏の吉板川　連尺
自然の神出来ぬ夏の暑　紀逸

成峯尾

大三十日言祝乃杯とゝ乾いろん　丹志

昭和四十八年八月寫了